

—若手技術者のコーナー—

復興道路の建設現場を肌で感じて

1. はじめに

平成27年に東北地方整備局に入省し、今年で5年目を迎えた。仙台の事務所で道路の積算業務と本局で技術審査関係の業務を3年経験し、今年の4月から仙台市を離れ岩手県久慈市にある三陸国道事務所久慈維持出張所への異動となった。久慈といえば、NHK朝ドラ『あまちゃん』の舞台（北三陸市）であり、まだ記憶に新しく、どこかヒロインのアキのようなハツラツとした土地の印象がある方も多いと思うが、急ピッチで進んでいる「復興道路」の工事を実際に携わることで感じたことや、若手の土木技術者の目線で感じていることをお伝えしたい。

2. 三陸沿岸の復興道路について

東日本大震災の甚大な被害のあと、復興に向けたリーディングプロジェクトとして仙台市から八戸市までの359kmにおよぶ「復興道路」が全線事業化され、震災後8年となり続々と開通している。三陸沿岸の北部に位置する久慈市でも八戸市へと繋ぐ「久慈北道路」をはじめとして復興道路の工事が密集しており復興事業の規模の大きさを直接肌で感じることができる。三陸の地域の人々にとって、この三陸が自動車専用道路で一つに繋がることへの期待は非常に大きい。三陸地域はもともと峠が多く、幹線道路である国道45号は急勾配・急カーブが連続する。私のようなバイク好きにはたまらないツーリングコースではあるが、ここで生活するとなると都市間の移動時間も長く苦勞するうえ、迅速で安定した救急搬送が困難であることから三陸沿岸道路の早期整備が期待されている。



地元中学生への現場説明会（夏井高架橋）

3. 土木技術者の見習いとして

現在、久慈の出張所では、三陸沿岸道路のうち久慈市内を通る7.4kmの久慈北道路の改築現場の監督業務と管内95.3kmの道路維持業務を担当している。

道路に対する知識がまだまだ未熟なこともあり、知識と経験の勉強に奔走する日々であるが、開通間近の現場での懸案や調整事項を直接学ぶことができ、非常に貴重な経験をさせてもらっている。その中でも私は復興道路の改築とともに、維持出張所として維持管理の業務も携わっていることから、今後の供用後の復興道路をどのように管理すべきなのかを考える重要な転換期になってきていると感じている。



関係機関との立会い（囲みが筆者）

4. おわりに

東日本大震災の甚大な被害のあと、急速ピッチで進んでいる復興道路の工事は、三陸の地域経済に間違いなく大きなインパクトを与えており復興需要を感じることができる。しかしその反面、震災から8年が経過し、沿線住民の方々からは工事騒音や工事用車両による渋滞など日常生活に不便が強いられている話も直接聞くこともあり、徐々に長期化する復興事業に疲れが生じてきているとも感じている。復興事業は8年が経過し、ひたすら造るだけでなく、今後は復興で築いてきたものを管理すること、また、複雑化していく地域の住民の感情にもっと寄り添っていける事業にしていなければならないと、現場で痛感しながら、日々奮闘している。

（国土交通省 東北地方整備局 三陸国道事務所
久慈維持出張所 管理第二係長 高橋 智信）